

基調講演

『熊本地震から1年。これから必要な取組み』

株式会社危機管理教育研究所

代表 国崎 信江氏



（※スライド資料をもとに発表が行われました）

先ほど釘羽さんからご自身の経験を踏まえ

て、初動対応から復興までの対応について、そして今後商店街でどのような取組みをすればいいのか、という貴重なお話を賜りました。私からは改めて、今後の商店街の取組みのなかで、地域の防災のためにどのようなことができるのか、ということをご提案できたらと思っております。

まずは、私が熊本地震においてどのような活動をしてきたのかということをご簡単に紹介いたします。私は震災後4月19日に熊本に入り、災害対策本部の支援活動をしていました。益城町では健康福祉センターの一部にある児童館を災害対策本部にして活動いたしました。特に、多くの方が詰めかけて混乱していた避難所の支援に内閣府の方と一緒に取組み、環境改善や自主運営の促進ということを行いました。町長にお願いして、避難所の職員の方々を一堂に集めて第一回の避難所運営会議を開いていただきました。自主運営に関しましては、うまくいっていたところと、支援に入ってもなかなか進まなかったということもありました。避難所の方々の入浴支援については益城町は自衛隊が3基ほど仮設の風呂を設置していただきましたが、撤退と共にお風呂も撤去されるということで、仮設シャワーの設置の他に、入浴施設をつなぐシャトルバスが必要と考え支援を行いました。また、車中泊、軒下避難者の方々の意向調査を行いながら、その都度被災者の皆様にとって何が 필요한のか、ということをご考えながら対応をまいりました。加えて、益城町の幼稚園、保育園の再開が滞っているということもありましたので、公立・私立、保育園・幼稚園の区別は関係なく全ての園長に集まっていただき、1日も早い園の再開のための会議をさせていただきました。さらに、日本ではじめてトレーラーハウスを活用した対応をご提案いたしまして、実現に至ったということがあります

こちら（スライド写真）がその避難所の様子です。益城町の総合体育館ですが、天井材が落ちた、ガラスが落ちた、というような非構造部材の被害が甚大であったために、本来指定避難所であった

場所が使えなくなったということが、混乱のひとつでございました。例えばこちらの総合体育館では、メインアリーナ、サブアリーナ、武道場が使えなくなり、全ての天井材を撤去するまで過密状態にありました。当初は、人であふれ通路も確保できず、階段の下や停電して使えなくなったエレベーターの扉の前など、とにかく場所があればそこに身を寄せている避難者が多数いらしたという状況でした。総合体育館では授乳室にも避難された方が入っていらっしまったため、授乳室も十分に使えないという状況でした。こういった中で避難所対応に苦勞されていた職員のサポートと、被災者の様々な相談事を聴きながらニーズを探って支援をしてきました。

先ほどお伝えしましたトレーラーハウスですが、日本で初めてこのトレーラーハウスを益城町では福祉避難所として活用した他、避難所で感染症の方の保護室とても活用しました。さらに、日本財団の助成を受け、このトレーラーハウスを使って、テントや軒下避難の方々がゆっくり足を伸ばして寝ることができるように、ホテルのようなスタイルをもって宿泊サービスというものも提供し、多くの方に喜んでいただきました。

こうした活動を行っている中で、多く耳にしたのが、「熊本には地震は来ない、といわれていた」ということでした。「まさかこの熊本に地震が来るとは…」ということなのです。実は私は昨年熊本地震が起きる前年の年に熊本県からの依頼で防災の講演会を行っていました。当時防災担当者からの「熊本県民は多くの方が風水害ばかり気にしていて、地震のことに対しては意識が低い、だから地震の防災講演会をお願いしたい」というお話受け、県内を何か所か回ってきております。ですので、熊本県の防災対策担当としては、「地震に対して備えなくては…」という意識があったということなのです。私が所属し委員を務めております文部科学省が主局の「地震調査研究推進本部」におきましては、熊本県について、過去にも熊本県内では地震が起きていて、活断層における影響も決して少なくはない、むしろ発生する確率の方が高いグループに入っている、ということを発表してきました。ここで着目していただきたいのが、熊本県内で起きた地震の中で、1889年 M6.3の地震です。明治22年に発生した地震で、この熊本城の石垣も大崩壊、5日間に2度大地震が発生しました。5ヶ月経っても激しい余震が止まらなかった、というような記録がはっきりと残されています。つまり、明治22年に今回の地震と似たようなタイプの地震が起きていたにもかかわらず、熊本県の方々は、県内には地震はほとんど来ていないという意識であったことから改めて、地震の教訓や伝承についての重要性を感じます。

私たち日本国民がこの熊本地震から学ばべきものは、地震はどこにでも起こり得るということです。地震が起きないところはないという意



識を持つことが必要です。首都直下地震、そして南海トラフの地震も発生の切迫性が指摘されています。ですので、この熊本もまた大きな揺れを経験するかもしれないという覚悟を持って、今、さらに防災力を高めていく時期にあらうかと思えます。防災とは流行り廃りにするものではなく、私たちがここに住む以上、欠かせない知識であり技術であるという意識を持つことが必要であらうかと思えます。

22年前に阪神淡路大震災が起きて、その時に国民の防災意識が上がり、時が経つと意識が下がっていった、新潟中越でも意識が上がって下がって、そして東日本大震災があつて上がって、6年経って下がって、こんな防災意識の上がり下がりを含めて一体いつまで繰り返すのか、という思いです。繰り返し申し上げますが、我が国に住む以上、防災は流行り廃りの事案にしてはならず、生活に根付かせていく、生活に防災を定着させていくということが重要ではないかと思っております。当たり前のように建物の耐震性が確保されていて、室内の家具や家電製品、生活雑貨類も固定されていて、そして生活に必要なものを事前に十分に備蓄しておく。これが我が国に生活する上で必要最小限の取組みであり、それが出来れば被害は減らせると思っております。



ここで恥ずかしながら、私の自宅を紹介したいと思います。私は横浜生まれ横浜育ちで、実は一度も大きな震災を経験しておりません。横浜と神戸の街並みはとても似ております。元町があつて港町で、そして中華街があつてという中で、阪神淡路大震災のような大きな地震が横浜に起きたら、私は家族を守ることができるのであらうか、という不安から防災の研究を独自にしていまいりました。22年経ちますが、私は阪神淡路大震災を機に、人生を賭けて防災対策をしてまいりました。具体的には22年間に、3回引越しをしました。より安全な土地を求めましたが土地を買ったというよりも、地盤を買いに行ったという意識でおります。この地盤に家族の命と、そして今まで築いてきた財産を載せる。それにふさわしい土地かどうか、というところを意識してまいりました。さらにその上に建つ建物に関しましては、子どもがおりますので、「災害が起きても我が家にいてさえくれればうちの子は大丈夫」と安心できるように安全な環境を意識してまいりました。震災があつた時に私が仕事で求められていることを災害直後から実行できるように、家族を心配しながらではなく信じられるように、「大丈夫、うちの家族はうちにいてさえくれれば生きている」という家を築いてまいりました。他にも、できるだけ命に関わるようなものを増やさないことを意識してきましたし、生活習慣の中でできるだけ表には物を出さないということをしてきました。使う時に出して使い終わったらしまふ、災害でいつ断水するかもわかりませんから、食べた食器はすぐに洗う、というこ

とをしてみいました。ここに果物がありますが、我が家にとって最高の非常食は果物です。多くの方が水と食料と分けて考えて備えようと考えていらっしゃると思います。もちろん我が家にも相応の水がありますが、水分を水だけで摂ろうとはせず、このような果物でも摂るのです。果物は私の中では非常食の王様だと思っています。水分や栄養も摂れて水も火も使わずにすぐに食べられるということから、これだけは表に出しています。キッチンの前には食事をするテーブルがございますが、ここにもテレビのリモコンひとつ、新聞ひとつ置かず、徹底して物を表に出さないという生活習慣をしておりますし、こちらの家具もしっかり固定して、窓ガラスには飛散防止の対策をして、扉には飛び出し防止対策をして、さらに棚には滑り止めシートを敷いて、中身も飛び出し防止対策をしております。中身の飛び出し防止対策はこういった家具だけでなく冷蔵庫等の引き出しも全て行ってあります。家族全員のヘルメットも用意しております。さらに20年かけてやってきたことのひとつに、家にある生活雑貨類を柔らかい素材にするということを実行してまいりました。たとえば写真立てはガラスや木のフレームから紙や革のフレームにしたり、照明も直付けがいいのですが、吊り下げ照明にしたいときには、和紙や布にしたり、お花を飾りたいという時にもアクリルの容器にこういったクッションカバーが花屋さんに売られていますので取り入れてきました。地震が来た時に、飛んできて人が怪我をしない、避難を妨げない、という目的で選んできました。

防災の対応、備え方というのは多様でございます。つまり、家にあるものを柔らかい素材にするだけでも安全対策に寄与するのだということがあります。これを、商店街の各店舗の方々に、皆様の店舗にあるもので、どのように家庭の防災対策向上に寄与することができるのか、という意識を持っていただきたいです。例えば私は商店街へ行った時に、花屋さんに「防災対策の品を見に来ました」と言いました。そしたら花屋さんは、「え、うち花屋ですよ」とおっしゃったんですね。「いえいえ、花屋さんにも防災対策できるものがあります。こちらはなんですか?」と聞くと「これはアクリルの容器とこれはクッションカバーです。いやこれ最近流行りなんだよね」と説明されたので「これ防災用品ですね」と言ったら、びっくりされておられました。地震のときに怪我をする人を軽減できるでしょうし、美しさと安全性を両立できるのです。商店街の各店舗さんでは、このように防災に活かせる商品がたくさんあるのです。それを各店舗さんに知っていただきたいと思います。

(このスライドは) 災害時の食事です。朝と昼用にパンやおにぎりがあって夜はお弁当ですが、食中毒防止を意識したおかず内容になっております。いくつかの選択肢はございましたけれども、それでもやはり生野菜がなかったりフルーツがなかったりで、非常に偏りがあるお弁当が続きました。実際にお店に行けば、自分で好きな食事を買うことも出来ましたが、ただでもらえるのだから



ら、今後の生活再建のために1円も無駄にしたくないということで、例えば女性は足がつるとか、貧血だとか、男性は血圧が上がったとおっしゃるのですが、そう言いながら毎日食べ続けていたというようなことがありました。

やはり、健康で過ごしていくということが重要ですので、食生活を疎かにすることなく日頃からの備えで健康に過ごせるような備えをしていただきたいと思うわけです。私は災害後も継続して自宅で過ごせるようにということで食料や消耗品全て1ヶ月分以上を備蓄しております。備蓄と言いましても、日常利用しているものを補充して常に1ヶ月分程度対応できるような量を確保しています。特に南海トラフの影響がある地域の方には10日分くらい用意して欲しいと思いますが、10日分用意するということが中々難しいというようなご意見もあります。

せっかくですから、この会場の皆様にもお伺いしたいと思います。今日の時点で、次の災害に備えて自宅に10日分程度の食料があるという方はどのくらいいらっしゃいますか？(会場：1~2人挙手) はい、ありがとうございます。皆様、大丈夫です、質問を変えましょう(笑)。冷蔵庫の中を全部食べ尽くしたら3日分くらいはあるんじゃないかな…という方はどのくらいいらっしゃいますか？(会場：より多くの方が挙手) はい、ありがとうございます。じゃあ次に常温保存です。お米だったりパスタの麺だったり、こういった常温保存のものや乾物やのりとかも含め、全部食べたら1週間以上あるといった方はどのくらいいらっしゃいますか？(会場：数名挙手) はい、ありがとうございます。ということはですね、両方手を挙げた方は10日分あるということですね。それから、少なくとも冷蔵庫の中には3日分ある、ということですが、災害を意識しなくとも、家が無事だったらこの食料は確保しているということになります。これが重要なキーワードなのですが、災害時イコール非常食という固定観念を一度外していただいて、普段から食べ慣れている、家族の方々が好きという食料を災害時にも食べることができた方が幸せです。これをどのように食べるのかということを考えていただくといいと思います。冷蔵庫が停電すると、中のものが傷んでいきますから、最初に冷蔵庫の中のものを全て食べつくします。これで3日分ですね。常温保存のものを含めて全部食べ尽くしていただければ、10日分はあります。そしてその後、まだ県外からの支援が来ないといったときに、こんな時のために用意しておいたんだということで、常備保存の非常食をここで食べていただきたいのです。建物が無事で、家で暮らせることができれば、家に備えたもので食べることができます。私は水も火も使わずに家にあるものを具材にしたレシピを、料理研究家と共に開発しています。

そこで商店街の皆様をお願いしたいのが、この日常の備蓄というものを推し進めていただきたいということです。東京都では都民の備蓄推進プロジェクトを行っております。自然災害に対して各家庭における食料品や生活必需品の備えの重要性を知っていただき、具体的な備えに繋げていくという日常備蓄プロジェクトです。都で用意している備蓄だけでは到底足りないだろうし、すぐに被災した都民の食料を県外から確保することもままならないだろう、ということから、日頃から自宅

において、日常備蓄をしてもらおうというプロジェクトを開始しました。舛添前都知事の時に始められたのですが、私はこのプロジェクトの検討会のメンバーです。プロジェクトの内容というのは、自宅で生活する場合に備えた備蓄は特別な準備を必要とするものではなく、日頃から自宅で利用・活用しているものを少し多めに備えておくことで、災害時にも活用することができる。だから日常備蓄を行なおう、というものです。さらに、東京都では11月19日を備蓄の日と設定をいたしまして、毎年この日にはイベントを各地域で行って備蓄の推進をしています。



私はこういった家庭内流通備蓄を実践し、それを全国に広めてきていますが、その中で、東京都の下高井戸商店街という商店街から、地域の防災力向上のために商店街ができることで、お店の方々にとっても利益があがるような取組みができないだろうかと相談を受けました。そこで私は、例えば日常売られている商品の中に災害時でも活用でき

るものを探して、商品のプライス表示のところに「防災」シールをつけることをお勧めしました。セール時には、安いし災害時に役に立つならもう一個買おうかな、なんていうことで販売促進にもつながる取組みです。また、冊子も作りました。私が各店舗に行きましたところ、最初は「うちは文房具屋だから防災とは関係ないよ」「うちは花屋だから」「うちは羊羹屋だから、防災に関係ないよ」と皆さんおっしゃっていました。でも羊羹は災害時の誘導食になりますし、文房具も子供の心のケアに必要なものがいっぱいあります。ガムテープも何かと役に立ちます。私は店舗ごとに私の視点で「あなたの店舗のこういった商品が災害時に役立つですよ」という話をいたしました。他にも例えば洋服屋さんですと、女性の着替えがない時にはスモックひとつで汚れている洋服を気にすることなく過ごすことができますし、和装店の場合は、さらしが災害時に役に立ちます。こういった商品が災害時の役に立つのかを話したところ、多くの方に「そうなんだ、これが防災用品になるんだ」と気づいていただけました。そして、各店舗でどんなものが災害時に役立つのか、というところをひとつひとつ挙げていただき、それを示すポップを作っていただき、ポップのついた商品を買ってくれた方にはこの期間だとスタンプを2枚押すというキャンペーンをしました。

つまり、消費者にとって備えが向上して、そして商店街の方にとっても売り上げが向上するという、お互いがWINWINの取組みができたわけです。全ての店舗でこの防災用品がここで買えますよ、というようなマップも作りまし、災害が起きた時にどこに避難をしたらいいのか、どこで情報をもらえるのか、ということも情報として冊子に盛り込みました。組合に入っていない各店舗で防災意識が違い、「うちはやらなくていいよ」なんていうお店もありましたけれども、そこは粘り強く、

商店街全体でやらなければ意味がないということ、交渉して、こういった商品を商店街ならではのお客様との会話の中で、どのように災害時に活用できるのかを説明されたらどうか…と話をしながら諦めずに皆さんを巻き込んでいきました。様々な商店街の方々がこの冊子が欲しいという要望があって、現在はこの内容を下高井戸商店街さんのホームページからダウンロードできるようになりました。皆様関心があれば是非ご覧いただければと思います。

非常時に役立つのは食料だけではありません。日用品の中でも災害時に役立つものがたくさんあるということを皆様に知っていただきたいと思います。例えば、メガネ屋さん。「うちは本当はないよ」とおっしゃったのですが、「これがあるじゃないですか」とお伝えしたのが、メガネに直接ライトをクリップでつけるものでした。読書する時や編み物をする時、細かい作業をする時などに使うもののようですが、「これはヘッドライトと同じですよ。これをヘッドライト代わりにメガネにつけたら自分の目線で物が見られるので便利です。これが防災商品になるのではないですか」とお話ししたら、「なるほど」とびっくりされていました。花粉症用のメガネも、先程鋸羽さんがおっしゃられていましたが、建物が崩壊した時にたくさんの粉塵が舞ったりもします。その時に目に異物が入ることもありますが、断水していると目が洗えないということもあります。ですので、早い段階でメガネなどを装着して目を保護することも大事です。ちょうど私が花粉症ということもあり、1年中この花粉症メガネを棚の中に入れておいて、災害がきたらすぐに装着できるようにしています。ですから、これも日用品でありながら災害時でも活用できます。液体歯磨きも被災地での口腔ケアに役立ちますし、このように見てみますと、今皆様のご家庭にあるもので災害時に使えるものはたくさんあるはず。ところが、防災用品は特別なものだと思っていると、そういったことに気が付かないことがあるのです。ですので、是非皆様のご協力を持って、日頃からこういったものを災害時に利活用できるというアドバイスをお客様にさせていただいて、販促に繋げていただきたいと思っています。

ところで、商店街の防災対策といたしまして私が消費者の一人としてひとつ不安になるのが、商店街は長いということです。長い中で、中央あたりで買い物をしていた時に地震が起きたら、一体自分がどうしたらいいのかわからないことです。全速力でこのアーケードから抜けたほうがいいのか、それとも中央で止まっていた方がいいのか、それとも店舗の中に入った方がいいのか。これが、各商店街の環境が違いますから、一概に「商店街はこうしましょう」とは言えないわけです。なので、是非皆様におかれましては、まずはやはり建物の耐震、そして耐火性を高めていただいて、安心して買い物ができるような環境を作っていただきたいということと、怪我を少なくするために陳列棚の固定や商品の飛び出し防止対策をある程度行って、お客様に致命傷を負わせないようにしていただきたいと思っています。

実は、先ほど私の家（の写真）にありましたように、100円ショップで売っているような滑り止めシートを一枚棚に敷くだけでその上にももの置けば逃げる時間を稼ぐだけの効果があります。それ

から、誘導です。私が商店街で買い物をしていた時に一体どのような行動をしたらいいのか、といった時に、スーパーと違うのは店員さんどこだろうと探さなくても各店舗に店主さん、販売員さんがいますから、すぐに声かけしてもらえ環境にあるわけです。その時に、「あなたはこうなさい」「みんなこうして」と言われたら、すごく安心できます。どこに身を寄せたらいいのか、どういう行動をしたらいいのかということをお教えるだけでいいような、そういった訓練をしていただくと嬉しいですし、さらにその訓練を消費者も一緒に行えたら、買い物していく中で自分はこうすればいいんだ、ということをお場で知ることが出来ます。

このような共に行う訓練であったり普及活動であったりを、商店街の皆様には是非していただければありがたいと思います。それから、地震があったときに、できればそこから外へ避難しなくてはならない商店街ではなくて、お客様をその商店街で止められるような、安全な一時避難所を確保していただけたらいいなと思います。先ほど空き店舗があったかと思いますが、いろいろな使い方があるかと思いますが、コミュニティスペースというものがあればそこに災害時に避難できるような空間が確保されていけばいいですし、さらにそこにある程度の備蓄があったなら、尚いいのではないかなと思います。

そして、保険・共済ですね。店舗ごとに被災状況は異なるかと思いますが、早期の復旧再開には、やはりお金があるかないかということが大きく影響してまいります。このようなことから、買い物ができるというお客様の安心にも繋がり、皆様の経営の安定にも繋がり、そして地域の活性化にも繋がるように、いち早くお店を再開していただくための手段をたくさん講じていただきたいのですが、その中のひとつにきっと、こういった保険・共済があるのではないかと思います。



残念ながら、これからも災害は減ることはなく、むしろ増えていきますでしょうし、ひとつひとつの災害が巨大化していくという時代にあります。ですので、一回地震が起きたからといって、もう来ないというのは誰にも言えないわけです。まだ復旧、復興の最中なのに…ということがないように、今からでもしっかりと次の災害に備えていただきたいと思います。その行動、姿勢こそが次の災害に強い商店街、街になっていくのではないかと期待をしております。

ということで、これで私の話を終わりにしたいと思います。長い間、ご清聴ありがとうございました。